

沖縄諸島におけるくびれ平底土器群の再検討 —グスク時代初頭における土器文化の転換解明の基礎作業—

はじめに

本論の最終的な目的：くびれ平底土器からグスク土器への転換過程を解明。そこから貝塚時代後期からグスク時代にかけての生活様式の変化の一端を見つける。
本論の位置づけ：くびれ平底土器からグスク土器への転換過程を明らかにするための準備段階。くびれ平底土器に焦点を当て、グスク土器との関係性は明確な対象としない。

1. 研究略史（表1）

90年代以前（多和田 1956, 高宮 1978, 1981, 1983ほか）
⇒研究の基礎が構築される。一方で、類似した型式の乱立に繋がる
90年代以降（岸本ほか 2000, 新里 2004ほか）
⇒諸型式の整理（アカジャンガー式・フェンサ下層式に統合）、年代観の整理

2. くびれ平底土器群研究の問題点

問題点①：編年重視の研究。生活様式の一部として土器を捉える必要性。
問題点②：アカジャンガー式・フェンサ下層式の型式区分の困難さ
⇒小林行雄（小林 1933）様式の採用
アカジャンガー式・フェンサ下層式の解体⇒「くびれ平底土器様式」に統合。
本論の目的：くびれ平底土器様式の明確な細分基準設定。

3. 分析方法

- 分析
包含層出土遺物⇒各遺跡の出土傾向から検討
一括資料⇒個別の検討
分析の対象要素⇒器種組成・文様・底部形態

・分類

壺（図2）I類：口縁部が外反、胴部が張る。
II類：口縁部が外反もしくは直口、胴部が張らない。
III類：口縁部が内傾する。

壺（図2）I類：口縁部が外反する。

II類：口縁部が直口。

ほかに・・・片口土器・ミニチュア土器・浅鉢がある。

底部形態（図3）

A類：くびれ平底もしくは平底。

B類：A類より底径が小形で、底厚が厚い平底。

文様分類（図4）

文様群①：工具などで施文する装飾方法を主体とするもの。

主な文様要素⇒口唇部刻目・沈線・刺突・刻目突帶

文様群②：粘土を張り付けるのみの装飾方法を主体とするもの

主な文様要素⇒突帶・ツノ状突起・コブ状突起・口縁部肥厚帶

4. 分析

器種組成（表2）

- ①壺I～III類、壺I・II類、片口土器、ミニチュア土器
- ②壺I・II類、壺I・II類、片口土器、ミニチュア土器（壺III類の減少）
- ③壺I・II類、壺I・II類、片口土器、ミニチュア土器、浅鉢（浅鉢出現）

器種組成は壺I・II類が大半を占め、壺類がそれに次ぐ。器種組成に大きな変化はなく、壺III類・浅鉢などは個数的に少ないため、細分化の基準とするのは難しい。

文様（表3）

文様群①が中心になる。（器種全体に施文）

例：米須貝塚・久志貝塚・喜如嘉貝塚・具志川グスク

文様群②が中心になる。（壺I・II類を中心に施文）

例：真栄里貝塚・フェンサ城貝塚・喜屋武グスク・我謝遺跡・安謝東原遺跡

尖底土器様式大当原式段階（図5）には文様群①の要素（沈線・口唇部刻目等）が多く見られる。（新里 2004）したがって・・・文様群①（古）⇒文様群②（新）の推測ができる。